ごみ分別 人工知能スマホアプリ作成手順 (概略)

2018/10/29 Rev.C

作業の流れ

- データセット準備 p.3
 - 画像収集
 - 画像水増し Ralpha
 - 画像アノテーション labelImg
 - Yolo-img-x28_windows.py

- labelImg 分類結果一括修正 p.4
 - replace_classid.sh
- データセットのチェック p.5
 - filecheck.py
- 学習用とテスト用画像振分け p.6
 - process2.py

前処理

学習

モデル検証

モデル変換

後処理

- 設定ファイル編集 p.7-8
 - 手作業

- · darknet 学習 p.9
 - darknet-train.sh

- ログの確認 p.10-12
 - Loss(損失)の収集
 - Loss(損失)のグラフ作成
 - darknet-log_grep.sh
 - 手作業

- mAP計測 p.13
 - darknet-map.sh
- mAP計測結果編集 p.14
 - darknet-map_grep.sh
- mAPグラフ作成 p.15-16
 - 手作業
- darkflow モデル変換 p.17-18
 - darkflow-flow.sh
- .weightsファイル削除 p.19
 - darknet-rm_100weights.sh
- スマホ p.20
- 参考 p.21

データセットの準備

- ごみの撮影
 - ごみを撮影し、撮影した画像ファイル(*.jpg)をごみの名前が付いたフォルダーに保存する
- リサイズ~水増し
 - Ralphaを使って画像を500x500位にリサイズ、水増しする
 - Yolo-img-x28_windows.py を使えば水増しの作業は不要
- バウンディング・ボックスの作成(アノテーション)
 - labelimg を使って、アノテーションを行う
 - 撮影分のみアノテーション後は、Yolo-img-x28_windows.py を使い、 画像の水増しとアノテーションファイルの自動生成が可能
- ・ 画像の集約
 - 学習は、すべての画像をまとめて学習するため、各担当が撮影した画像ファイルとアノテーションファイルを1つのフォルダーに集約する
 - 具体的には、すべてのフォルダーから学習する画像ファイルとアノ テーションファイルを、~/darknet/data/all フォルダーにコピーする

labelImg 分類結果一括修正 replace classid.sh

Purpose:

- アノテーション時に<mark>分類番号を間違えたとき</mark>、生成したテキストファイルの先頭1文字(間違っている分類番号)を正しい分類番号に置き換える
- 但し、分類番号は、0~9まで

- \$./replace_classid.sh <フォルダ名> <ファイル名> <変更後の分類番号>
- <ファイル名>は、<ファイル名>で始まる.txtファイル
- 例
- \$./replace_classid.sh data/2nd cell 2
 - ・ 以下を実行する
 - \$ sed -i -e 's/^. /'\$NEW_CLASSID' /g' \$FOLDER'/'\$FILE*.txt



データセットのチェック filecheck.py

Commentary:

- データセットは、画像ファイル(*.jpg)とアノテーションファイル(*.txt)のセットが必要
- 学習中に、片方が無い場合、エラーが出て手戻りになるので、学習前に、filecheck.pyを使って、画像ファイル(*.jpg)とアノテーションファイル(*.txt)のペアの存在をチェックしておく

Purpose:

- 画像ファイルとアノテーションファイルのペアが存在するかチェックする

Usage:

- \$ python filecheck.py <フォルダ名>

画像とアノテーションファイルの水増し

Yolo-img-x28_windows.py

Process:

- 画像の撮影を終えたあとは、手作業でアノテーションを実施する
- 水増しの前に、画像のExif情報を読み取り、「向き」の方向に回転して から、Exif情報を削除する(回転後の画像を基本画像とする)
- 基本画像を、4方向に回転(×4倍)した後、各種画像変換(×6種)を 行い、基本画像を24倍に水増しする
- 同時に基本画像のアノテーションファイルも24倍に水増しする

- \$ python yolo-img-x28_windows.py <image folder>
 - classes.txt があるとエラーが出て途中でやめるので移動しておくこと
- 例
- \$ python yolo-img-x28_windows.py data/2nd

学習用画像とテスト用画像を振り分ける

process2.py

Purpose:

学習用画像(90%)、テスト用画像(10%)に振り分けて、それぞれのリストを作成する

Usage:

- 引数でフォルダ名とテストする割合を指定する
 - \$ python process2.py <image folder> <ratio of test(%)>
 - \$ cd ~/darknet
 - \$ python process2.py data/2nd 10
 - (注意) データセットを GPUマシンにコピーしてから実行するか、GPUマシンと同じフォルダ名の 別のPCで実行しないと、学習時に正しいフォルダ名がみつからず、エラーになる

Output:

- test.txtとtrain.txtが、darknetフォルダにできるので、data/2nd へ移動 する
 - 例
 - test.txt: 440行、train.txt: 3960行、合計: 4402個

darknet設定ファイルの作成/編集 (1/2) 手作業

- ~/darknet/cfg にあるフォルダを流用コピーして新しいフォルダを作成する
 - 例
 - \$ cd ~/darknet/cfg
 - \$ cp all all2
- *.data を編集する
 - 例: 分類数=10の場合の all2.data
 - classes = 10
 - train = data/all2/train.txt
 - valid = data/all2/test.txt
 - names = cfg/all2/all2.names
 - backup = backup

darknet設定ファイルの作成/編集 (2/2) 手作業

- *.names を編集する
 - 例: all2.names
 - 分類名を列挙する
- *.cfg を編集する (tiny-yolo の場合)
 - 例: all2.cfg
 - 125行目: classes = 10
 - 119行目: filters= 75
 - filters = (classes + 5) * 5

darknet 学習 darknet-train.sh

Purpose:

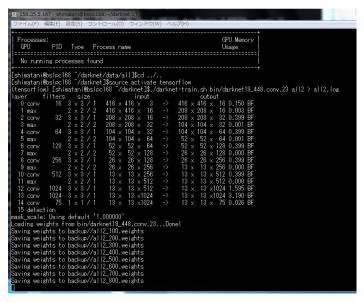
 darknet(YOLO)が提供している事前学習済み重み係数モデル (darknet19_448.conv.23.weights)*1を使って学習する

- \$./darknet-train.sh <事前学習済みモデルファイル名> <作成するモデル名>
- 例
- \$./darknet-train.sh bin/darknet19_448.conv.23 all > all2.log
- *1学習済みの重み係数モデルを用いて、繰り返し新たな学習を行う転移学習方法が、かば焼きや串カツに使われる秘伝のたれの再利用方法に似ている。ここから、この方法により学習を重ねた重み係数モデルを秘伝のたれと呼び、この方法による転移学習方法を秘伝のたれ学習法と名付けたが、評価の結果、繰り返し学習されるごみが過学習になる懸念があったため、この方法ではなく、darknetが提供するモデルを利用することにした。

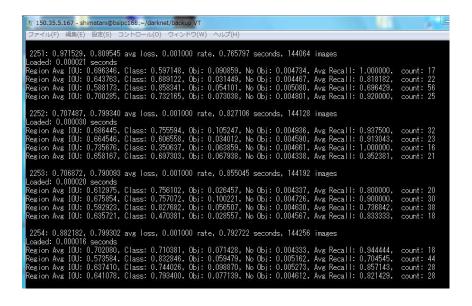
Loss(損失)の収集

Commentary:

- 学習中のLossをグラフ化するために、画面出力をログファイルに落とす
- 学習中の画面をリダイレクトすると画面がスクロールしなくなるので、 ターミナルをもう一つ開いて、tail コマンドで表示する
 - \$./darknet-train.sh bin/darknet19_448.conv.23 all > all2-train.log
 - \$ tail —f all2-train.log



学習コマンド実行中画面



ログ収集中画面



Lossの収集~グラフ作成

darknet-log_grep.sh

Purpose:

エクセルでのグラフ化を容易にするために、logファイルから、loss を 含む行だけを抜き出したテキストファイルを作成する

Usage:

- \$./darknet-log_grep.sh <生成された.weighs 保存フォルダ名>
- 例
- ./darknet-log_grep.sh all2

Function:

— ファイル backup/all2-train.log を開き、all2-train-A.txt を出力する



Lossの収集~グラフ作成 手作業

- Purpose:
 - エクセルを使い、loss計測結果をグラフ化する
- Process:
 - all2-train-A.txt をエクセルで開く
 - 元データの形式:
 - のカンマやタブの区切り文字・・・ を選択
 - 次へ
 - □カンマ をチェック
 - □スペース をチェック
 - ロその他 をチェックして、":"を入力
 - ・ 口連続した区切り文字は1文字として扱う をチェック



mAP 計測 darknet-map.sh

Purpose:

- .weightsファイルからmAPを計測する
- 計測結果は、mAP 計測結果編集スクリプト darknet-map_grep.sh を 使って見える化する

- \$./darknet-map.sh <モデル名>
- 例
- \$./darknet-map.sh pp4



mAP 計測結果編集 darknet-map_grep.sh

Purpose:

- mapファイルからグラフ表示に必要な行だけを抜き出す
- darknetが出力するファイルに、CRLFが含まれるので、これをLFに置き 換える

- \$./darknet-map_grep.sh <モデル名>
- 例
- \$./darknet-map_grep.sh pp4



mAPグラフ作成 (1/2) 手作業

- Purpose:
 - エクセルを使って、mAP計測結果をグラフ化する
- Process:
 - *-map_result-B.txt をエクセルで編集しグラフ化する
 - 元データの形式:
 - のカンマやタブの区切り文字・・・ を選択
 - 次へ
 - □カンマに、チェック
 - □その他に、=入力



mAPグラフ作成 (2/2) 手作業

- ファイルを開く

- 例
- A列をall2_*でフィルタリング
- A列をコピーして、A列の最終行以下に貼り付け
- A列をmean_averageでフィルタリング
- B列をコピーして、B列の最終行以下(A列貼り付けの右)に貼り付け
- C列をprecisionでフィルタリング
- D列をコピーして、C列の最終行以下(B列貼り付けの右)に貼り付け
- F列(recall)をコピーして、D列の最終行以下(C列貼り付けの右)に 貼り付け
- H列(F1-score)をコピーして、E列の最終行以下(D列貼り付けの右)に貼り付け



darkflow モデル変換 (1/2) darkflow-flow.sh

- Purpose:
 - .weightsファイルを.pbファイルに変換する
- Usage:
 - \$./darkflow-flow.sh <モデル名>
 - 例
 - \$ cd ../darkflow
 - \$./darkflow-flow.sh all2
- Post process:
 - WinSCPを使って、tiny-yolo-voc-graph.pbモデルを、
 G:\(\frac{4}{2}\)Android\(\frac{4}{2}\)Project\(\frac{4}{2}\)garbage\(\frac{4}{2}\)assets\(\frac{4}{2}\)tiny-yolo-voc-graph.pb にダウンロードする



darkflow モデル変換 (2/2)

darkflow-flow.sh

Function:

- (1/9) カレントディレクトリを darkflow に変更
- (2/9) darkflowフォルダにプロジェクトフォルダを作成
- (3/9) * final.weights ファイルを、darkflow/binフォルダにコピー
- (4/9)ファイル名を、yolov2-tiny-voc.weights に変更
- (5/9) darknetの.cfgファイルをdarkflowにコピー
- (6/9) darknetの.namesファイルをdarkflowのlabels.txtにコピー
- (7/9).weightsモデルを.pb形式に変換
- (8/9)ファイル名を、yolo-v2-tiny-voc.pb から、tiny-yolo-voc-graph.pbに変更
- (9/9 darkflow/built_graph/プロジェクト名 フォルダを作成し、pbモデルをここに移動



.weightsファイル削除 darknet-rm_100weights.sh

Purpose:

- ディスク容量削減のために、100回ごとに生成した.weightsファイルを 削除する
- 1000回ごとの .weightsファイルは削除しない

• Usage:

- \$./darknet-rm_100weights.sh <モデル名>
- 例
- \$ cd ../darknet
- \$./darknet-rm_100weights.sh pp4

Android Studio

- Android Studio
 - 同期
 - ビルド
 - Build Variant をdebugにし、Build~Buils Apk(s)
 - G:\footnote{\text{Android}\footnote{\text{Project}\footnote{\text{garbage}\
 - Build Variant をreleaseにし、Build~Buils Apk(s)
 - G:\footnote{\text{Android}\footnote{\text{Project}\footnote{\text{garbage}\
 - Build Variant をreleaseにし、Build~Generate Signed Apk
 - G:¥Android¥Project¥garbage¥release¥garbage-release.apk ができる
 - スマホをPCにつないで、Run 実行

weights ファイル保存間隔の変更方法

- http://demura.net/misc/14592.html
- 3. ネットワークのウェイトを保存する間隔を変更
- ~/src/darknet/examples/detector.cでは、ネットワークのウェイトを保存する間隔は138行目で次のようになっている
- つまり、学習回数が1000回未満のときは100回毎に保存し、それ以降は 10,000回毎に保存する
- なお、ウェイトはデータ設定ファイルでしたディレクトリbackupに保存される
- if (i%10000==0 || (i < 1000 && i%100 == 0)) { // これを10,000回までは 1000回毎にも保存したければ次のように変更する
- if (i%10000==0 | | (i <= 1000 && i%100 == 0) | | (i <=10000 && i % 1000 ==0)) {